

災害児童文学の想像力とラフカディオ・ハーン

宮澤文雄

1. はじめに

2011年3月の東日本大震災以降、自然災害に対する社会的な関心の高まりの中、災害を描いた過去の文学作品が見直されるようになった。そのひとつに、昭和のはじめに小学校国語教科書に採用された「稲むらの火」がある。この物語は、1854年の安政南海地震で発生した津波によって紀伊国広村（現・和歌山県広川町）が襲われた際、濱口儀兵衛（梧陵）が水田に積まれた稲むらに火を放ち、逃げおくれた村人たちに避難路を示して命を救ったという実話を背景としている。「稲むらの火」が震災後に優れた防災教材として再評価される中で、Lafcadio Hearnの“A Living God”にも注目が集まった。ハーンの描いた“A Living God”は、日本人の民俗神道、とりわけ人を神として祀る習俗の存在を西洋の読者に説明した作品である。「稲むらの火」は、津波から村人を救った濱口が生神様になった（史実では祀られていない）という“A Living God”の最終章から、濱口が村人を津波から救ったところまでを抜き出し、語り直したものだ。このように国語教科書の教材として翻案され受容されていく過程で、本来の宗教性は脱色され、防災教育色が強められていくようになる。

報告では、“A Living God”の教材化を小学校教育を通じた一種の児童文学作品化と捉え直し、ハーンが描いた人と自然の交感から生まれる霊性の文学の側面がこの過程で失われていくことに注目した。興味深いことに、その後の第二次世界大戦、東日本大震災という災禍を経験した後の児童文学の中から、ふたたび霊性に価値を見出そうとする作品が登場する。そうした文脈を押さえながら、震災後という状況から生まれた現代の児童文学の想像力がハーンの文学と近いことを指摘し、震災後におけるハーンの読解可能性を児童文学から探ることを試みた。

2. “Tsunami”とハーン

ハーンと自然災害との繋がりについて、*OED* 第二版の“tsunami”の項目に注目した。同書ではハーンの *Gleanings in Buddha-Fields* に収録された“A Living God”が、英語文献で初めて“tsunami”という語を用いたとしている（637）。しかし、のちにハーンよりも早い使用例が見つかる。それは、1896年9月号の *National Geographic Magazine* に掲載された明治三陸地震の報告で、ハーンの発表よりも3ヶ月早かった。記事を書いたのは、女性ジャーナリストの先駆けといわれる写真家の Eliza Ruhamah Scidmore。シドモアは、明治三陸地震が発生すると、取材のために被災地に入り、東北地方の太平洋沿岸部を襲った地震津波災害の状況を世界に伝えた。シドモアの記事“The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan”における“tsunami”の語は、“a great earthquake wave (tsunami)”（285）のように情報を補う程度の使用にとどまっている。いっぽうハーンのほうは、津波の歴史性、発生メカニズム、破壊力を的確に伝えながら、“tsunami”という外国語を西洋の読者に説明する（“A Living God” 14）。さらに村が津波に呑み込まれていく物語が語られることによって、読者は生々しい“tsunami”のイメージを共有していく。単にハーンがシドモアの記事よりも読まれたというのではなく、こうした伝え方が“tsunami”の語を世界的な普及へと導いた。

ハーンが自然災害に対する独特な見方についても確認したい。神戸時代のハーンは、“Earthquakes and National Character”という風土論的エッセイを発表する。その中でハーンは、日本人の物質的生活に不安定性（instability）を認め、自然の不安定性に人工的な不安定性を対置させることで、日本人はこれまで過酷な環境に対処し、その結果のひとつとして、根気や忍耐力や環境への順応性を国民レベルの能力として育むことができた（51-52）。こうした視点の風土論が西洋人によって書かれたのは当時としては珍しかった。なぜなら、イングランドの民話「三匹のこぶた」を例に出すまでもなく、強固なもので自然に対抗していく西洋的な発想のもとでは、普通、木造建築に代表される日本人の物質的生活は脆弱で劣ったものと見做されるところを、ハーンはそうではなく、その脆弱性から生まれる弾力性を洞察し、日本人の国民性を高く評価しているからだ。

3. “A Living God”の国語教材化

“A Living God”が、小学校教育を通じて翻案されていく過程で、防災教育色が強められていく傾向を見ていく。「稲むらの火」の誕生は、国定教科書を制作する文部省が1934年に国語と修身の教材を全国に公募したことに始まる。作者の中井常蔵は、和歌山の小学校教員で、故郷の偉人である濱口儀兵衛を顕彰するために“A Living God”から最終章を抜粋し翻案したといわれている。「稲むらの火」は、濱口が収穫したばかりの稲むらを犠牲にして津波から村人の命を救った点に話が絞られ、非常事態における濱口の機転を利かせた避難活動と自己犠牲が強調される。ハーンの“A Living God”のように、村人によって生神様として祀られるという結末は描かれず、濱口のヒューマニズムとヒロイズムを讃えた物語になっている。

「稲むらの火」の入選には、その前年に昭和三陸地震が発生したことや前回の明治三陸地震の教訓が生かされなかったことによる反省が関係していたと考えられる。例えば、昭和三陸地震の二ヵ月後、地震学者の寺田寅彦は小学校からの防災教育の必要性を訴え、世論を喚起している。また、教科書掲載後には、日本地震学会の会長を務めた今村明恒が、本作に防災教育教材としての優れた価値を認め、みずから教本を製作している。

そして、大規模地震に対する社会的関心が高まる 2000 年代になると、一度教科書から消えた「稲むらの火」は、地震学者の河田恵昭によって新たに書き直され、およそ 60 年ぶりに国語教科書に登場する。河田の「百年後のふるさとを守る」は、「稲むらの火」を踏まえつつ、津波から村人を救い出した後に濱口が私財を投じて堤防建設に取り組んだという実話に基づいた続きを書き足すことで、自然災害を避難・救助・防災・復興・伝承というより広範な視点から捉え直し、防災教育をさらに強く意識した作品となる。

東日本大震災以降、「A Living God」が再び注目されたのは、「稲むらの火」や「百年後のふるさとを守る」といった児童文学化作品による防災教育への貢献だったことは間違いない。ただし、「A Living God」における地震津波は、日本の民俗神道を説明する目的で採用されたのであり、本来、本作は荒ぶる自然とそれに耐える人間とのあいだで幾度となく繰り返されてきた激しい交流を通じて、身体的にも精神的にも戦慄する人間がうちなる霊性を呼び覚ましていくことを描く。「稲むらの火」は、「A Living God」から神道理解にかかわる部分を切り捨て、ハーンの霊性の文学の側面を取り上げず、その後の「百年後のふるさとを守る」もまた立ち返ることはなかった。

4. 戦後及び震災後の災害児童文学

興味深いことに、戦後および震災後の災害児童文学には霊性に価値を見出そうとする作品が現れる。戦後の作品として Pearl S. Buck の *The Big Wave* (1948)、震災後の作品として絵本作品を紹介したい。

バックの *The Big Wave* で注目したいのは、戦後まもなくアメリカ人作家によって日本を舞台とする災害文学作品が書かれた点である。冷戦構造の中でいかなる戦略があったにせよ、津波によって家も家族も失って深く傷ついた少年が、周囲の温かい愛情に支えられて少しずつ立ち直っていき、愛しい死者の影と共にふたたび海の生活に戻ることを決意して、かつて家族と暮らしていた思い出の浜辺に新しい家と家庭を再建する、という本作は、戦後傷ついた日本の土地とそこに住まう人々の心の復興を願う物語として読み直せる。戦争と自然災害という災禍を心災として捉え、精神的な復興を描く本作は、傷ついた者が、その傷ゆえに、その人にとって真に尊いものに拓かれてゆく、という霊性の文学といえる。

また、震災直後に出版された絵本の中にも、霊性の想像力と結びついた作品がいくつも確認できる。例えば『奇跡の一本松』(2011)、『ひまわりのおか』(2012)、『ハナミズキのみち』(2013)は、樹木や死者の視点を採用し、植物の生育に人の成長や郷里の復興を重ねながら、目に見えない存在との対話を通して自然と人間の共生を深く見直し、死者と共に生きる可能性を探っている。

5. おわりに

戦争や震災に関わる児童文学は、時代の見直しをはかる傾向が強い。それは、作者と読者のあいだに、作者である大人から読者である子どもに託すという関係が強調されるためだ。この関係が維持されると、次の時代を担う子どもたちに何を伝えるべきかと問う視点が強くなり、こうであってほしいという理想や希望が書き込まれる。バックの *The Big Wave* やポスト 3.11 の絵本作品が求めたのは、自然に対する畏怖と共感、死者と共に生き直す可能性だった。このような何かを新しく作り出すことに価値や意義を見出すのではなく、これまであったことや、自然や先人との豊かな繋がり、そして見えないものへの関心をふたたび取り戻すことに価値をおく災害児童文学の想像力は、神や靈魂をめぐる“A Living God”のみならず、死者と生者、超自然と人間のコミュニケーションを描いた *Kwaidan* (1904)に代表されるハーンの霊性の文学と近い距離にあるといえるだろう。

引用文献

Hearn, Lafcadio. “Earthquakes and National Character.” *Editorials from The Kobe Chronicle*, edited by Makoto Sangu, Hokuseido Press, 1960, pp. 50-53.

———. “A Living God.” *The Writings of Lafcadio Hearn: Gleanings in Buddha-Fields and The Romance of the Milky Way*, vol. VIII, Rinsen Book, 1988, pp. 3-23.

Scidmore, Eliza Ruhamah. “The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan.” *National Geographic Magazine*, Sept. 1896, pp. 285-289.

“Tsunami.” *Oxford English Dictionary*. 2nd ed, vol. XVIII, Oxford UP, 1987, p. 637.